様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７９２５３６

研究課題名（和文）精神科デイケアのリハビリテーション研究―精神障害者の生活機能を評価基準にして―

研究課題名（英文）The Rehabilitation of psychiatry day care: Base on the daily life functions of patients with mental disorders

研究代表者
齋藤　深雪（SAITO, MIYUKI）

山形大学・医学部・准教授

研究者番号：３０３３３９８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，精神障害者の生活機能（社会で生活する能力）の変化を検討し，精神障害者の生活機能に対する精神科デイケアのリハビリテーション効果を明らかにすることである。方法は，郵送法で質問票を用いた調査を行った。質問票には，生活機能評価尺度を用いた。精神科デイケアを利用している精神障害者は，一定の生活機能を維持していた。生活機能の変化には，通所目的の有無，通所目的に対する達成度が影響していた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the rehabilitation effect of psychiatry day care basing on the daily life function with users. The method used was a questionnaire survey sent out by post. This study clarified that psychiatry day care users had the daily life function to certain extent. The achievement of purpose and the existence of purpose had influenced change of the daily life function.

研究分野：看護学

キーワード：生活機能　精神科デイケア　リハビリテーション

１．研究開始当初の背景

（１）精神障害者のリハビリテーションにおける精神科デイケアの重要性

障害者総合支援法が施行され，精神障害者のリハビリテーションはこれまで以上に重要になっている。精神科リハビリテーションの目標は，精神保健福祉対策上では「精神障害者が完全に自立した生活をすること」である。臨床専門家の間では「精神障害者が支援を受けながら社会で生活すること」という現実的なリハビリテーション目標に変化しているが，精神障害者の社会生活を支える施設や体制の不十分さが問題になっている。

その中で精神科デイケアは，生活技能を身につけるなどの生活支援と，再入院の予防などの医療を提供している。そのため，精神科デイケアは，精神保健福祉対策の施設の中で「精神障害者が支援を受けながら社会で生活する」という現実的なリハビリテーション目標に最も適した支援を提供している施設であるという点で，非常に重要な施設である。

（２）リハビリテーションにおける精神科デイケア研究の課題

精神科デイケアのリハビリテーションに関する研究は，主に精神科デイケア通所者の生活技能に対する効果や，再入院予防などの医療に対する効果について検討されている。しかし，精神科デイケア通所者の生活技能への効果に関する研究は，研究者によって着目する生活技能と，その生活技能を測定する尺度が異なるため，精神科デイケアのリハビリテーション効果を共通指標として示すことはできていない問題点がある。また，精神障害者が社会で生活する能力を把握する試みはなされてきたが，生活技能や生活の質などの生活の一部の能力しか把握できなかった。

2001 年に発表された ICF（国際生活機能分類）は，「社会で生活する能力」を生活機能という側面から捉えられることを提言した。ICF は，生活様式や文化の異なる国々が共通理解する手段として，世界から期待されている。ただし，ICF の具体的な活用方法については使用者にゆだねられている状況である。ICF に関する研究が積み重ねられているものの，ほとんどは ICF の説明や ICF の概念図のみを使用した研究である。そのため，精神障害者の生活機能に関する精神科デイケア研究は少なく，「精神障害者が支援を受けながら社会で生活すること」に対する精神科デイケアの効果を明らかにできていない問題点がある。

（３）応募者がこれまでに行った「精神障害者が支援を受けながら社会で生活すること」に対する精神科デイケア研究と今後の研究

リハビリテーションにおける精神科デイケア研究の課題から，ICF を具体的に活用し，精神障害者の社会で生活する能力，すなわち生活機能を把握する「精神障害者生活機能評価尺度」を開発した。これによって，精神障害者の生活機能を把握することが可能になった。精神障害者の生活機能はどのように変化するかが解明されていないため，開発した「精神障害者生活機能評価尺度」を使用し，精神科デイケア通所者の生活機能の３カ月間の変化を検討した。その結果，３カ月間という期間で精神科デイケア通所者の生活機能は向上したことを明らかにした。

その後，精神障害者の生活機能の１年間の変化を検討した。その結果，精神科デイケア通所者は１年前と同じ生活機能を維持していたが，精神病院外来通院患者は１年前よりも生活機能が低下したことを明らかにした。通所期間によって，生活機能の変化に差がみられた。これまでの研究から，精神障害者の生活機能は，単に右肩上がりに向上するのではなく，変化しながら少しずつ向上していく可能性のあることを明らかにした。

ただし，生活機能の経時的変化の特徴とその理由は解明されていないため，精神科デイケアのリハビリテーション効果を示すまでには至っていない。生活機能の経時的変化の特徴が不明であること，精神科デイケア通所者の平均通所期間は約４年間であることから，今後の研究では４年間の縦断研究をし，生活機能の経時的変化の特徴とその理由を明らかにする必要性がみえてきた。

２．研究の目的

平成２４年度から２７年度の４年間で，以下のことを明らかにする。

（１）精神障害者の生活機能の変化を明らかにする。

（２）精神障害者の生活機能の変化に影響を与える背景要因を明らかにする。

（３）精神障害者の生活機能の経時的変化の特徴から，精神科デイケアのリハビリテー

ションの効果を明らかにする。

３．研究の方法

（１）研究方法の概要

平成２４年度から２７年度は，精神障害者の生活機能に対する精神科デイケアの効果を明らかにするために，縦断研究を行った。質問票を用いた調査を４回実施した。調査から得られたデータは，統計的に分析した。

（２）平成２４年度の研究方法

平成２４年度は，４年間の縦断調査のうち１年目（第１回目調査）を実施した。調査対象は，全国の病院付設型精神科デイケアの利用者（統合失調症），および就労継続支援施設の利用者（統合失調症）であった。調査方法は，質問票を用いた調査を郵送法で行った。質問票の主な内容は，精神障害者生活機能評価尺度，J-RAS，背景に関すること(年齢，性別，同居家族の有無など)，通所に関すること（通所目的，通所期間など）であった。

（３）平成２５年度の研究方法

平成２５年度は，４年間の縦断調査のうち２年目（第２回目調査）を実施した。調査対象は，平成２４年度の対象者と同様であった。調査方法は，平成２４年度の調査から１年後の追跡調査であった。質問票を用いた調査を郵送法で行った。質問票の内容は，平成２４年度の質問紙と同様であった。

（４）平成２６年度の研究方法

平成２６年度は，４年間の縦断調査のうち３年目（第３回目調査）であった。調査対象は，平成２４年度の対象者と同様であった。調査方法は，平成２４年度の調査から２年後の追跡調査であった。質問票を用いた調査を郵送法で行った。質問紙の内容は，平成２４年度の質問紙と同様であった。

（５）平成２７年度の研究方法

平成２７年度は，４年間の縦断調査のうち４年目（第４回目調査）であった。調査対象は，平成２４年度の対象者と同様であった。調査方法は，平成２４年度の調査から４年後の追跡調査であった。質問票を用いた調査を郵送法で行った。質問紙の内容は，平成２４年度の質問紙と同様であった。

（６）倫理的配慮と調査手続き

本研究は，厚生労働省の臨床研究に関する倫理指針にもとづき，実施した。対象施設の長に研究の趣旨を文書で説明し，研究に対する同意を得た。その上で，施設利用者に研究の趣旨，自由意思の尊重，同意の撤回の自由，個人情報の保護を文書で説明した。質問票への回答をもって，同意を得たこととした。質問紙は，封筒を厳封した上で回収箱を介して回収した。なお，本研究は研究者が所属する施設の倫理委員会の承認を得た。

４．研究成果

（１）平成２４年度の研究

対象者は，精神科デイケア利用者 500 名，就労継続支援施設利用者 805 名であった。対象者のうち，調査の協力が得られ，質問項目に未回答や重複のない者を分析対象とした。分析対象は，精神科デイケア利用者 384 名(69.8%)，就労継続支援施設利用者 484 名(60.1%)であった。

統計分析の結果，以下のことが明らかになった。精神科デイケアと就労継続支援施設の利用者は一定の社会で生活する能力，すなわち生活機能を維持していた。生活機能の高い利用者は自己主張する能力が高かった。自分で家事を行うかどうか，同居している家族によって，生活機能に差がみられた。

精神科デイケア利用者は，通所目的をもっている方が通所目的をもっていないよりも生活機能が高かった。また，通所目的の達成度が高い利用者は通所目的の達成度が低い利用者より生活機能が高かった。就労継続支援施設利用者でも同様の結果であったが，精神科デイケア利用者にこの特徴が著しかった。

生活機能の変化に影響する背景要因は，通所目的をもっていること，通所目的に対する達成度が高いこと，自分で家事を行うこと，同居者の有無が予測された。

（２）平成２５年度の研究

統計分析の結果，精神障害者は１年後も継続して一定の生活機能を維持していた。生活機能に変化がみられた精神障害者では，通所目的をもっていること，通所目的に対する達成度が高いことが生活機能の変化に影響していた。

（３）平成２６年度の研究

統計分析の結果，精神障害者は平成２４年度から２年後も継続して一定の生活機能を維持していた。生活機能に変化がみられ

た精神障害者は，通所目的の有無，通所目的に対する達成度が生活機能の変化に影響していた。

（４）平成２７年度の研究

統計分析の結果，精神障害者は平成 24 年度から３年後も継続して一定の生活機能を維持していた。生活機能に変化がみられた精神障害者は，通所目的の有無，通所目的に対する達成度が生活機能の変化に影響していた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①齋藤深雪，鈴木英子，吾妻知美：「自己評価式精神障害者生活機能評価尺度（参加面）」の妥当性と信頼性の検討．日本保健福祉学会誌　21 (2)：11-21，2015．　査読の有無：有．

②齋藤深雪，鈴木英子，吾妻知美：「自己評価式精神障害者生活機能評価尺度（活動面）」の妥当性と信頼性の検討．日本保健福祉学会誌　21 (1)：33-41，2014．査読の有無：有．

③齋藤深雪，鈴木英子，吾妻知美：精神科デイケア通所者の生活機能の実態．日本保健福祉学会誌　20(1)：35-45，2013．査読の有無：有．

〔学会発表〕（計８件）

①齋藤深雪，鈴木英子，吾妻知美：就労継続支援施設利用者（統合失調症）の生活機能の実態．第 35 回日本看護科学学会，広島国際会議場，広島県広島市，2015 年 12 月 5-6 日．

②Miyuki Saito，Kato Mariko，Eiko Suzuki，Tomomi Azuma，Akiko Maruyama，Yukiko Sato :Relationship between life functioning of individuals with mental disabilities, housework, and roles of family members．12th International Family Nursing Conference, Odense - Denmark，19-21 August 2015.

③Miyuki Saito, Kato Mariko，Eiko Suzuki，Tomomi Azuma, Yukiko Sato :The actual state of life functions in people with mental disabilities as a function of purposes for regular visits to care facilities．35th International Association for Human Caring Conference，Kyoto International Conference Center，Kyoto - Japan，24 - 25 May 2014.

④Miyuki Saito, Kato Mariko，Eiko Suzuki，Tomomi Azuma，Yukiko Sato :Lifestyle characteristics correlated with daily life functions of patients with mental disorders．25rd International Nursing Research Congress，Hong Kong – China，24 - 28 July 2014.

⑤Miyuki Saito, Kaoru Baba，Eiko Suzuki，Tomomi Azuma，Yukiko Sato，Shiho Sato : Correlations between the Lifestyle Backgrounds and Lifestyle Functions of Day-care Attendees. 24rd International Nursing Research Congress，Prague-Czech，22 - 26 July 2013.

⑥齋藤深雪，馬場薫，吾妻知美：精神障害者小規模作業所通所者の通所目的による生活機能の比較．第 39 回日本看護研究学会学術集会，秋田県民会館，秋田県秋田市，2013 年 8 月 22-23 日．

⑦齋藤深雪，鈴木英子，吾妻知美，：精神科デイケア通所者のアサーティブネスと関連する背景．第 33 回日本看護科学学会学術集会，大阪国際会議場，大阪府大阪市，2013 年 12 月 6-7 日．

⑧Miyuki Saito，Kaoru Baba，Eiko Suzuki，Yukiko Sato，Shiho Sato :Comparison of Communication Ability of Patients with Schizophrenia Based on Objective for Attending Day Care Using J-RAS as a Standard．23rd International Nursing Research Congress，Brisbane-Australia，30 July - 3 August 2012.

６．研究組織

(1)研究代表者

齋藤　深雪（SAITO　MIYUKI）
山形大学・医学部・准教授
研究者番号：３０３３３９８３